SPORTS FOR ALL ～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIVERSITY
50周年記念シンボルマーク

Monthly Report

SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS
Vol.136 / 2017 AUG.
（月1回発行）

第23回夏季デフリンピック競技大会
佐々木琢磨選手と星泰雅選手がメダル獲得

デフリンピックでの活躍を報告する佐々木選手（左）と星選手（右）

7月にトルコ・サムスン市を会場に開催された第23回夏季デフリンピック競技大会に本学から新助手の佐々木琢磨選手（平成28年体育学科卒）と、体育学科1年の星泰雅選手（宮城・東北高校出身）の2名が日本代表として参加しました。

佐々木選手は陸上競技の男子4×100mリレーに出場し、日本新記録を叩きだして見事に金メダルを獲得。また、100mリレーでは第7位に入賞しました。また、星泰雅選手は水泳競技の男子4×200m自由形リレーと4×100メドレーリレーの2種目で銀メダルを、また、4×100m自由リレーでも銅メダルを獲得しました。

2名は8月5日（土）に阿部芳吉学長を表敬訪問し、大会の結果を報告。佐々木選手は「100m決勝で7位という成績は本当に悔しい思いでしたが、リレーでの金メダルは日本新記録と併せてうれしく思っています。大会期間中には現地での食事が合わず体調を崩してしまいましたが、様々なサポートのおかげで良い結果を挙げることができました」と語り、星選手は「大きなプレッシャーを肌で感じ、また、世界とのレベルの差を思い知らされた大会でした。リレーメンバーとしてメダルをいただけたことはうれしいですが、更に練習を重ねていきたいと思います」と今後の活躍も誓っていました。

報告を受けた阿部学長は「二人のメダル獲得は大学挙げて喜びたいと思います。それぞれに健康に留意し、目標達成できるよう今後の大会に向けて頑張って下さい」と二人を激励しました。

デフリンピックは4年に1度、世界規模で行われる聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会であり、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD、CISS）が主催する国際競技大会です。

〈目　次〉

・第23回夏季デフリンピック競技大会 佐々木選手と星選手がメダル獲得	1
・仙台大学開学50周年記念行事 OB監督率いる高校野球部交流大会開催	2
・卒業生の高畑裕司さん 日本野外教育学会論文奨励賞を受賞 ・「みやぎヘルスサテライトステーション事業」でウォーキングレッスン	3
・U19男子バスケWorld Cup in カイロ 視察報告	4
・「えいごdeバスケ」にAT部の学生が 参加	5
・日本スポーツ栄養学会第4回大会 参加報告 ・2017オープンキャンパスを開催 ～過去最高の1,086名が来場～	6
・全日本プッシュスケルトン選手権大会 優勝を学長に報告 ・女子サッカー部 「東北Liga Student2017」で2連覇	7

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通　0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

仙台大学開学50周年記念行事

OB監督率いる高校野球部迎え、50周年記念交流大会開く

交流大会の初戦で本学チーム（手前）と戦った遠来の佐賀・敬徳高校チーム

仙台大学開学50周年を記念する「硬式野球部OB高校監督交流大会」が8月7，8の両日、本学第2グラウンド（野球場）など4市町を会場に開かれました。宮城、福島、秋田、岩手、佐賀の５県から計15チームが参加。台風の影響による雨のため、試合は初日だけになりましたが、各チームはそれぞれ秋の新人戦に向けて戦力を確かめながら交流を深めました。

同大会は、本学硬式野球部OBが指導に当たる宮城県内外の高校硬式野球チームを一堂に集め、交流戦を通してお互いの実力を磨こうと、20数年前に5チームで始まりました。その後、中断しましたが6年前に復活。大学時代は硬式野球部員でなかったものの、現在勤務先で硬式野球監督を務めるOBの高校チームも加えて毎年この時期に開いてきました。この間、いずれも本学OBの監督が率いる聖光学院、東陵、古川工業の各校が甲子園出場を果たしています。

OB会主催の今年の交流大会は、本学開学50周年に当たることから「記念大会」とし、全国のOB監督に参加を呼び掛けた結果、監督自らバスを運転し25時間かけて九州・佐賀県から駆け付けた敬徳高校はじめ、計5県の15チームが集まり、本学硬式野球部3チームも合わせた18チームによるイベントになりました。全国高校野球選手権大会11年連続出場中の福島・聖光学院（監督の齋藤智也氏は本学17回生）のBチームも加わりました。

交流大会は、6球場に振り分けられた各校が2日間にわたって戦う形式で、一部チームは本学に宿泊しての参加となりました。このうち、初日の本学第2グラウンドでは敬徳高校と聖光学院に仙台大学Aチームによる交流戦となり、高校チームの奮闘が光りました。

初日の試合の後、柴田町内の飲食店で各校監督・部長と仙台大学硬式野球部OB会のメンバーら30人余による懇親会が開かれ、本学から阿部芳吉学長と高橋義夫硬式野球部長、入澤裕樹コーチが出席しました。席上、阿部学長は「OBの皆さんが指導に当たる各高校が切磋琢磨して実力をさらに高め、やがてその球児たちが仙台大学の戦力として入学するよう期待します」と挨拶。参加校のうち遠来の敬徳高校・鷹巣聡監督（9回生）は「最初で最後という思いで佐賀県から参加しました。部員にとって得難い経験をし、刺激を受けたと思います」と成果を披露しました。最後に大会事務局の佐藤政信代表（７回生）が「大会日程をどう設定するかの難題もありますが、できればもっと多くの高校に参加を呼びかけ、交流大会を盛り上げたい」と締めくくりました。今回の参加15校には、本学から開学50周年記念のグッズが贈られました。

自らバスのハンドルを握り、佐賀県から25時間かけて駆け付けた
敬徳高校の鷹巣監督（本学９回生）

現在、高校で硬式野球部監督を務めるOBは北海道から沖縄まで30余人に上ります。

【報告：硬式野球部 部長 教授 高橋義夫】

卒業生の高畑裕司さん　日本野外教育学会論文奨励賞を受賞

代理で表彰式に出席した岡田講師（左）

2017年6月に開催された日本野外教育学会第20回記念大会にて、当学会の論文表彰が行われ、本学卒業生の高畑裕司さん（2014年度卒業）の「大学キャンプ実習におけるふりかえりが参加者の集団凝集性に及ぼす効果（2016）」という論文が受賞し、表彰されました（野外教育研究，第18巻第2号，55-66頁掲載）。

野外教育学会では、3年ごとに、野外教育研究に掲載された論文に対して審査を行い、優秀論文賞と奨励賞を贈っており、奨励賞は35歳未満の若手研究者を対象に送られる賞です。高畑さんは、仙台大学のキャンプ実習で卒業論文のデータをとり、卒業論文として書き上げた研究論文を、卒業後に野外教育学会に投稿し、査読を経て原著論文として掲載されました。現在は、美里町立新鶴小学校で講師をしており、当日は残念ながら業務のため受賞式には欠席となってしまったため、指導教員である岡田が代わりに賞をいただいてまいりました。

以下のコメントは、高畑さんが受賞に際して寄せたものの一部です。

「仙台大学時代にASE（アウトドアでのグループワーク）指導に参加した際、活動後にグループ全員が顔を合わせて話し合うふりかえりに魅力を感じたことが、当研究への第一歩となりました。調査対象としたキャンプ実習では、当研究への協力のために負担が増えたカウンセラーやキャンパー、ふりかえりの時間を設けるためのプログラムを作成していただいたディレクターなど、たくさんの方に迷惑をかけてしまったと思います。しかし、ふりかえりが集団凝集性の向上に及ぼす効果を明らかにできたこと、さらには、この度の素晴らしい賞をいただけたことで、ほんの少し恩返しができたかなと感じています。

私は、現在小学校で子どもたちの教育に携わっているのですが、当研究成果を活かし、日々の授業の中でもふりかえりを取り入れるようにしています。子どもたちにとって学習内容の確認となるだけでなく、自らの反省や感想を書いたノートを見せ合い生き生きと話し合う姿も見られ、互いの意見を尊重し合う良い人間関係の構築につながっていると感じています。」

今回の受賞は、指導教員の私にとっても、名誉であり、非常に喜ばしいことでした。まずは、多くの人の協力を得て完成した研究が、より多くの人の目にとまり、野外教育の領域や教育現場に還元することができたと考えています。さらに、卒業論文でも頑張って取り組めば原著論文のレベルのものができるだけではなく、学会で受賞できると示すことができました。これは、今後卒論・修論に取り組む学生にとって大いに励みになるはずです。私自身も、自分の指導スタイルに対する大きな自信につながりました。今後も現場に還元できるような研究を目指し、指導をしていきたいと考えています。

【報告：講師　岡田　成弘】

「みやぎヘルスサテライトステーション事業」でウォーキングレッスン

講義を行う齋藤新助手

8月26日（土）にイオンモール名取において「みやぎヘルスサテライトステーション事業」（主催：宮城県、主管：イオンリテール）の一環として行われているウォーキングレッスンに講師として参加をしました。この事業は、県民の健康づくりを推進するため、イオンモール名取を個人の健康づくりの実践をサポートする身近な拠点等とし、買い物等の日常生活の中で健康チェック・健康相談の実施や，健康情報の提供等を行っていくというものです。

本学は毎月開催するウォーキングレッスンでの講義を担当しており、今回はその第1回目となりました。参加者が少ないと予想していましたが、約30名のお客様が参加され、ウォーキングの効果等を実技も交えて楽しく学んでいただきました。買い物中に足を止めて、遠くからレッスンを見ていらっしゃるお客様も多く、ショッピングモールを健康情報発信の拠点にすることは様々な層をターゲットとできるため、非常に効果的であると実感しました。

ウォーキングレッスンは平成30年3月まで毎月最終土曜日の11時～12時にイオンモール名取で開催されます。お時間がありましたら是非お立ち寄りください。

【報告：新助手　齋藤まり】

U19男子バスケWorld Cup in カイロ　視察報告

7月6日(木)～11日（火）の間、エジプト・カイロ市で開催されたU19男子バスケWorld Cupを、朴澤理事長・学事顧問、マーティ・キーナート上級アドバイザー、中村明成高校教頭で視察した。同一学校法人設置の明成高校が高校男子バスケWinter Cupで３年連続日本一を獲得した時の立役者で、NCAA Division Ⅰの強豪校である米国ゴンザガ大学に進学した八村塁と、関東リーグの強豪校である中央大学に進学した三上侑希が、日本代表チームに選抜され出場したからである。三上はチーム・キャプテンを勤めた。

日本チームは、グループCに属し、予選リーグ3試合の結果は１勝２敗（●67-78スペイン，○76-73マリ、●75-100カナダ）でグループ３位となり、決勝トーナメントでは、1回戦、１～８位までの上位グループ進出をかけイタリアと対戦した。前半29-21でリードも第３Qに逆転を許し、最終第４Q残り16秒から、八村がわずか８秒の間に連続２本の３Pを沈め、残り２．４秒で55-55の同点に追いついたが、その直後ジャンプシュートを決められ、２点及ばずに55-57で世界ベスト８を逃し、9-16位グループに入ることになった。

イタリアは準優勝しており、この大接戦はこれまでの日本代表では考えられなかったという高い評価を得た。ちなみに、優勝はカナダ、スペインも大会４位と、予選リーグの対戦相手はいずれも強豪チームであった。

八村選手（右から2人目）と三上選手（同4人目）

9～16位グループ順位決定トーナメントでは、１回戦の対韓国戦を77-64で勝利、２回戦でも相手方の圧倒的な声援のなかホストチームのエジプトに76-73で勝利、３回戦の対プエルト・リコ戦で67-68という僅か1点差で敗退という惜しい結果となり、日本チームの最終順位は歴代最高の１０位となった。日本のFIBAランキングは27位であるのに対し、韓国は15位、エジプトは14位、プエルト・リコは18位と、いずれも上位チームに対する善戦であったことは、2020東京に向けての明るい展望が開けたことを意味する。

八村は、対韓国戦で21得点、対エジプト戦で18得点等、全試合で中心選手としてチームを引っ張り、全出場選手のランキングでも、23.7ポイント（23.7得点、11.0リバウンド）で2位という成績を獲得した。三上も、対エジプト戦で大事なところで3Pを決め勝利に貢献した。両選手の教育関係者として、出張者全員が日本のスポーツに大きく貢献できた満足感を得ることができた視察であった。明成高校中村教頭も、八村　塁という逸材を、高校3年間、技術・精神両面でしっかりと鍛え上げ、米国の大学バスケ界の強豪で文武両道のゴンザガ大への進学を達成させたことに、明成高校の一員として大きな誇りを感じると述懐していた。

【朴澤記・中村教頭報告から編纂】

文部科学省 情報ひろばでのイベント開催

8月31日（木）に文部科学省情報ミュージアム「情報ひろば」にて、本学のスポーツ健康科学研究実践機構によるイベント「健康ひろば」を開催しました。このイベントは8月より実施している、旧庁舎3階の情報ひろば企画展示室の展示「体育大学による被災地での健康支援」に関連したものです。当日は、健康福祉学科4年浅井美樹、同3年伊藤颯希、同3年加藤瑞稀の3名の学生が参加し、参加者への体組成測定等を行いました。参加者からは「カラダの状態を数値で知ることができるので嬉しかった」、「結果を踏まえて運動に励みたい」など、多くの反響をいただくことができました。また、本学が被災地で取り組んできた健康づくり支援をについて、被災者に寄り添って行ってきた活動を紹介できる機会となりました。阿部学長も応援に駆け付けてくださり、学生に激励の言葉を頂きました。

応援に駆け付けていただいた阿部学長と

文部科学省情報ひろば企画展示室での本学の展示は12月21日まで実施されています。東京に足を運ぶ機会がありましたら、是非お立ち寄りください。

【報告：新助手 齋藤まり】

「えいごdeバスケ」にAT部の学生が参加

7月30日（日）、HALEOドームあすと長町にて開催された仙台89ERS主催の「えいごdeバスケ」というイベントに学生アスレティックトレーナーとして参加をしました。業務内容は「参加者に応急処置が必要になった際の対応」「クリニックの補助業務」の2つでした。クリニックまでの時間は会場で起こりえる怪我や体調不良などを想定し、諸々の準備を行いました。当日のクリニック中は、足首の捻挫に対する初期対応などを行いました。また、参加していた選手の中には怪我をしている選手もおり、これ以上の怪我の悪化を防ぐため、練習を注意深く観察するなどしました。

今回のクリニックの対象が小学生ということもあり、基礎的な練習が中心で接触プレーがなかったため、子供達は大きな怪我なく終えることが出来ました。私は熱中症で体調を崩す子供達が出るのではないかと予想し、そのための準備もしていましたが、当日は暑かったものの幸い施設は風通しが良いように工夫されていたため、熱中症等は発生しませんでした。株式会社ボディプラスインターナショナルがスポーツドリンクの提供をしていたため、水分補給がスムーズに行える環境でした。参加者の子供達や保護者も過ごしやすい環境でクリニックを楽しんでいたように思いました。

今回プロスポーツチームの活動の一環としてこのようなクリニックに学生アスレティックトレーナーとして参加し子供達と触れ合う中で、プロチームが地域のスポーツ振興に努めていることを身近に感じることが出来ました。現場の雰囲気はとても明るく、参加している子供達が楽しむイベントでありながら、見ている人もスポーツを楽しむことができるイベントだと実感しました。また、以前にトレーナーサポートとして89ERSのインターンシップに参加していたこともあり、選手が顔を覚えていて下さいました。それにより、プロ選手との交流も含め、サポートに楽しさを感じることができました。日々のトレーナー活動で繋がりを大切に行動していたからこそ得ることが出来た機会だと思いました。

私は現在大学4年生で、将来の進路で悩んでいた矢先にこのイベントに参加しました。89ERSスタッフの方も海外留学を経験しているということを知り、海外に興味のあった私にとって大きな意味を持つイベントとなりました。私は将来スポーツに携わった仕事に就きたいと考えています。2020年に行われる東京オリンピックでは、英語を話す機会の少ない日本に海外のトップ選手が訪れます。日本で外国人選手が快適に過ごすことができれば、選手のベストコンディションを作るだけでなく、日本の良さを選手自身に感じてもらうことが出来ると思います。つまり、外国語を話すという能力を身につけることで、日本で行われるオリンピックがより外国人選手の記憶に残るものとなるのではないかと考えます。これまで学生アスレティックトレーナーの活動を中心に行ってきましたが、「えいごdeバスケ」を通し、スポーツをする人に対する違う視点からのサポートに気づくことが出来ました。この気づきで私は将来の可能性を広げることができるのではないかと感じました。これからの学生生活では、物事の視点を2つ以上考えるようにしていきます。そこに新しい発見や気づきが生まれる可能性があると感じながら、多くのことに挑戦していきたいと思います。

【報告：体育学科4年　大塚　百恵】

※本報告は「えいごdeバスケ」の主催者側から学生トレーナーの派遣の依頼を受けた白坂広子新助手より情報提供いただきました。

日本スポーツ栄養学会第4回大会 参加報告

8月18日（金）～20日（日）の3日間に渡り、大妻女子大学千代田キャンパスにおいて日本スポーツ栄養学会が開催されました。

大会プログラムのなかには、夏冬併せて7回のオリンピックに出場された橋本聖子さんによる「2020年オリンピック・パラリンピック東京大会がもたらすもの」と題してスポーツを通じた人材育成と健康街づくりについての特別講演や、リオデジャネイロ2016オリンピック・パラリンピック大会の栄養サポート、2020年のビックイベントに向けた食のホスピタリティ、ジュニアアスリートのタレント発掘・育成事業の現状と今後の展開、女性アスリート特有のスポーツ障害と問題点、さらにはスポーツ栄養学の基礎研究の新しい知見などを取り上げたシンポジウムが組み込まれていました。一般演題では、栄養サポートの実践報告や、食教育、食事とスポーツパフォーマンス、女性アスリートなど、多くの調査・研究報告がなされました。本大学からは、早川公康教授、岩田純准教授、山田大進新助手、山上はるか新助手、畠山朝美さん（大学院生）が学会での発表を行いました。

第4回目となる今大会は「2020年に向けてスポーツ栄養学に求められるもの」をテーマとし、大会長である大妻女子大学家政学部　小清水孝子教授より講演がありました。近年ではトップアスリートのみならず、ジュニアアスリート、健康づくりのためのスポーツなど、現場における栄養サポートのニーズが社会的に高まり、公認スポーツ栄養士の育成・養成プログラムも確立されました。栄養サポートはスポーツ科学の各専門スタッフと連携してエビデンスに基づき実施されますが、エビデンスが十分でない事例も多く、栄養サポート現場で持ち上がった課題点や問題点に対して考察、事例報告をまとめていくことの重要性を話されました。また、運動生理学、運動生化学、スポーツ医学、心理学、トレーニング論など様々な分野と連携し、情報提供・交換していくことも求められます。本大会を通じて2020年の東京オリンピック・パラリンピック、それ以降の次のステージを見据え、スポーツ栄養学のさらなる発展を目指したいと述べられました。

仙台大学運動栄養学科では、運動・スポーツの現場および教育の現場、健康づくりの現場において運動・スポーツを行う人に対し栄養指導ができる能力を身につける運動栄養サポーター制度が確立されました。今回の学会では、運動栄養サポーター上級を取得した学生のうち2名（梅津龍さん、阿部紗央理さん）の学生も学会に参加しました。学会に参加したことで学んだことや感じたことを運動栄養サポート研究会活動で活かすとともに、後輩たちにも受け継ぎ、さらに盛り上げていってほしいと強く思います。私たち教職員も、2020年、さらにその先に必要とされる今後のスポーツ栄養学に求められるものを考えながら、現場における栄養サポートのニーズ応えられるよう、取り組んで参りたいと思います。

【報告：新助手　菊地遥】

2017オープンキャンパスを開催～過去最高の1,086名が来場～

毎年恒例となっている本学のオープンキャンパスが8月5日（土）に開催され、梅雨明け宣言直後の大変暑い中ではありましたが、今年は高校生や保護者など1,086名の方々にご来場いただき、おかげさまで来場者数が過去最高を記録しました。

オープンキャンパス当日は10時からオープニングセレモニーが開催され、6学科それぞれの学生の代表が学科の特色や取得できる資格、就職先などをわかりやすく紹介しました。

オープニングセレモニー終了後には、本学の施設・設備について詳しく知ることができる「キャンパスツアー」や、保健体育教師を目指す高校生を対象とした特別講座、小論文講座、本学とオリンピック・プロスポーツに関する展示会など数多くのイベントを用意し皆さんをお迎えしました。

参加した高校生からは「仙台大学にはたくさんの施設が充実していて大変興味を持ちました」「将来はアスレティックトレーナーになりたいと考えており、テーピングの体験会などはとても参考になりました」といった声が多く寄せられ、大盛況のうちに終了しました。

全日本プッシュスケルトン選手権大会優勝を学長に報告

8月29日（火）、全日本プッシュスケルトン選手権大会の結果報告のため、ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の学生らが阿部学長を表敬訪問しました。

8月5日に長野県長野市を会場に開催された同大会では、男子の部で明成高校1年生の木下凛選手が初優勝、女子の部では本学研究員の小室希選手が5度目の優勝を果たし、その他にも本学関係者が多数入賞しました。

阿部学長（前列中央）を表敬訪問したボブスレー・リュージュ・スケルトン部の学生
（優勝した木下選手は右から3人目、小室選手は同5人目）

初優勝の報告をした木下選手は「日頃のトレーニングの成果を出すことができ、更にコースレコードを出しての優勝は大変うれしく思います。次は（スケルトンの）全日本選手権で表彰台を狙います」と力強く語ってくれました。また、小室選手も「大きなケガをきっかけに新たなトレーニング方法を考え実践することによって出た成果だと思います。平昌オリンピック出場に向けて更に練習を重ねたいです」と2月に開催されるオリンピックに向けてさらに気を引き締めている様子でした。

全日本プッシュスケルトン選手権はスケルトン選手のオフシーズンの成果を発揮する場の一つとして毎年開催されています。

プッシュスケルトン選手権について（ルール）

①光電管をスタート板から15mと65mの位置に設置し、その間の50mを100分の１秒まで計測する
②競技順について、１本目はくじ引き、２本目は１本目の順位の遅いものからスタートし、２本の合計タイムで順位を争う
③選手は、スケルトン競技用のスパイクかルールに合った陸上用のスパイクを用いる

（長野県ボブスレー・ルージュ・スケルトン連盟HPより引用）

女子サッカー部「東北Liga Student2017」で2連覇

8月16日～17日の二日間、山形県酒田港北緑地公園多目的広場にて東北Liga Student2017決勝トーナメントが行われ、準決勝で常盤木学園高校（1－1、PK戦4－2）、決勝戦で聖和学園高校（2－1）に勝利し、優勝・大会2連覇を達成することができました。この大会は東北地域の高校・大学12チームが参加し、4月からのリーグ戦、8月の決勝トーメントを戦うレギュレーションになっています。

2連覇を達成した女子ｻｯｶｰ部

表彰式では、本学主将の髙野沙緒里（体育学科4年）が「運営に携わってくれた各チームの先生方や生徒の皆さんに感謝します。私が大学を卒業してからもこの大会がさらに発展し、東北地域の女子サッカーが盛り上がってくれることを願っています。」と優勝スピーチを行いました。

【報告：女子サッカー部 監督 講師 黒澤 尚】